Agri Report ――北の大地を拓く新・農業人【9】

土作りを重ね畑作と養鶏をリンク 四半世紀で見えてきた成果と課題

循環型農業で有機農産物の普及を図る千歳の「はるか農園」

札幌から車で1時間ほど、都市近郊に位置しながら十勝地方に次ぐ大規模な畑作が営まれている千歳市。今から四半世紀前、その一角に30代の青年が新規就農した。当初からの営農スタイルは、有機栽培で野菜を育て、その一部を鶏の飼料にして畑作と養鶏をリンクさせ、昔ながらの「循環型農業」を実践すること。2ヘクタールの農地でスタートし、途中で規模拡大を図り、現在は17ヘクタールに玉ねぎやスイートコーン、ケール、カボチャ、大根などを栽培する。「はるか農園」を牽引してきた三浦賢悟さんを訪ね、これまでの歩みに学ぶとともに、慣行栽培の営農技術の進歩に追いつけず、課題が山積する有機農業の将来に対する思いを訊いた。

（ルポライター・滝川 康治）

本格的な降雪期を前に大型トラクターで緑肥作物を鋤き込む作業の手を休める「はるか農園」代表の三浦賢悟さん

土づくりに取り組み四半世紀 「養鶏＋有機栽培」を実践して

千歳市の東部に位置し、ゆるやかな丘陵地帯に畑や草地が広がる東丘地区にある「はるか農園」。取材に訪れた昨年11月下旬、降雪期を前にした緑肥の鋤込みや、鶏に食べさせるケール（アブラナ科の野菜）の収穫が行なわれていた。

ここでは、有機農産物を育て、その残渣を鶏の飼料にする循環型の農業を実践しながら、四半世紀にわたり土を良くする技術を磨いてきた。現在は、17ヘクタールの農地に玉ねぎやジャガイモ、スイートコーン、レタス、ケール、ニンニク、大豆、カボチャ、米、緑肥用の燕麦（えんばく）などを作るかたわら、1300羽ほどの採卵鶏を飼育する。

農場を切り盛りするのは、代表の三浦賢悟さん（1967年、帯広市出身）と妻の順子さん（72年、福岡県出身）、5人余りのスタッフだ。

25年前に新規就農し、2ヘクタールの農地で「養鶏＋露地野菜の栽培」からスタート。コープさっぽろが創設した農業賞で受賞したことをきっかけに引き合いが増え、規模拡大を進めてきた。慣行栽培を続けてきた土地だったこともあり、当初は土が固く、砕土作業にも苦労したが、鶏糞を活用するなど土づくりに励み、安定した生産ができるようになった。

牧場研修を経て新規就農を実現 岐阜の師匠も応援し基盤づくり

代表の三浦さんの父親はホクレン職員として各地を転勤し、祖父も農業関係の仕事をしていた。そんな家庭で育ったが、自身は農業をしようとは思わず、親が敷いたレールに従って北大の法学部に進んだ。

学生時代、家庭教師のアルバイトをするうちに、昔はほとんどいなかったアトピー性皮膚炎の子が増えていることを実感する。水や大気の汚染が落ち着いた時代なのに、どうしてか――「食べものに問題があるのでは…」と思った。

法学部で学ぶテーマは「人間をどう罰するのか？」の根拠をめぐる哲学。しかし、現実は理を追究できず、適当なところでごまかしているのではないか……。そんなことを考え、今後の進路に悶々とする中で、知人から「農業をやったらどうか」と勧められたこともあったという。

卒業後は東京でアルバイト的に働いた。就農前の90年代後半、岐阜県内の有機農場を見学したが、当時はまだ農家をやる気はなかった。

その農場には見学者が絶えず、「いちいち相手にしていたら、自分の仕事ができない」と対話を固辞され、言葉の弾みで「じゃ、僕は農家になります」と言ってしまう。すると、心を開いてくれ、泊まり込みで数日間、話を聞くことができた。

こうして就農の決意を固めた三浦さんは、映画の上映会を通じて、千歳市内で牧場や動物病院を営む元JICA技術協力専門員の南繁さん（49年、大阪生まれ・獣医師）と出会う。そのつてで、99年秋から1年半、市内の牧場で研修生活を送った。

「千歳の新規就農制度ができて間もないころで、市や農協も前例がほとんどなく、手さぐりの状態だった。就農の最低条件は、農地2ヘクタールで、施設園芸＋露地野菜を想定したものでした」（三浦さん）

周囲から養鶏を取り入れるよう勧められ、研修先の牧場の納屋を借り、まずは百羽ほどの鶏を飼った。

「鶏を大事に扱うと、鶏自身にもいいし、卵の質も良くなる――と思い、中島正さんの著書『自然卵養鶏法』を参考にやってみました。研修時代から、施設園芸の代わりに養鶏を手がけ、卵を売る、と。（行政などには）そうした養鶏を柱にした新規就農を認めてもらいました」

こうして2001年、現在地での就農を果たす。三浦さんは、すでに30代の半ば近くになっていた。

前出・岐阜の農家には、よく相談に乗ってもらった。就農が決まった時には、「売り先がないんだから、全

野菜として出荷後、アブラナ科植物のケールは鶏の飼料にもなる

部の畑で有機のジャガイモを作りなさい。俺がすべて買うから…」と言ってくれた。そこで、最初の年は2ヘクタールの畑にジャガイモだけを作ったという。

慣行栽培を続けてきた就農地は、土が固くて草が多く、機械を使っても砕土できない。ポテトディガー(収穫機械)を貸してもらうが、使い方がよく分からない……。収穫には1カ月くらいかかった。イモをすべて買い取るという師匠の応援には、ずいぶん助けられた。

そんな苦労を重ねながら毎年、堆肥を散布して土づくりを進め、有機栽培の基本ができるまでに5年間ほどかけた。その間に有機JASの認証制度が始まり、北海道有機農協も設立されて基盤も整ってきた。

現在は1,300羽ほどの採卵鶏を平飼いで育て、卵は直販する

「農業賞」きっかけに規模拡大 自然栽培の米づくりにも挑戦

コープさっぽろが主催する、07年の第4回農業大賞で「コープさっぽろ会長賞」を受けたことは、はるか農園にとって追い風になった。賞金でブラジルの農業を視察できたし、「実績がないから…」との理由で受けられなかった、公庫資金の融資にもOKが出た。そこで三浦さんは、新たに10ヘクタールの農地を取得して規模拡大を進める一方で、養鶏中心から畑作にウエートを置く経営にシフトしてきたという。

当初は経営の柱だった平飼い養鶏は現在、1300羽ほどを飼育する。

「昔は自給自足型の新規就農者が多かったけれど、今は養鶏中心の人がほとんどですね。僕は『鶏＋畑』で循環するやり方がいいと思うので、少し寂しい」と、動物を飼う営農スタイルにこだわる。人手が集まりにくくなってきたこともあり、近年はジャガイモ中心の栽培から玉ねぎなどの野菜に力を入れてきた。

三浦さんは、農園のホームページの冒頭に、こう記している。

「……野菜を有機栽培(有機JAS認証)で育て、その作物を鶏の飼料にして、農業と養鶏をリンクさせ、昔ながらの『循環型農業』を実践しながら技術を磨いています……」

牛糞や鶏糞などの堆肥を活用した土づくりを続けてきたことで、農場の土が良くなってきた。

「そしてある時、野菜のほうから『もう肥料はいらないよ』と反応するタイミングがあるんです。すると、作物によっては肥料がいらなくなりますね」(三浦さん)

だから、「収穫する作物の質が良くなるためには何がいいのか?」を常に考えているという。

就農して数年後から稲作も手がけ、現在は1ヘクタールほどの水田で自然栽培の米づくりに取り組む。昨年からは、(公財)農業・環境・健康研究所(岩元明久代表理事・静岡県伊豆の国市)が育成した『大地の光』(品種登録出願中)の自然栽培を試みている。

有機農産物の柱のひとつ・ジャガイモの収穫作業(はるか農園提供)

『大地の光』は、もともと本州の品種だったが、選抜をくり返し、北海道でも栽培できるようにしたもので、「一穂あたりの重量が多く、熟期は遅いけれど、千歳でも9月下旬から10月上旬には収穫できます。タンパク含有量が少なく、とても美味しい米なので、今後も力を入れたい」と、三浦さんは意欲的だ。

営農技術が発展途上で課題山積 有機農業の未来に強い危機感も

「学校や商店がなくなり、地域の機能が失われる中で、もっと新規就農者が増えてほしい」と願い、積極的に研修生を受け入れた時期もあったが、今は話があれば対応する程度にとどめている。大規模な畑作経営ができる千歳では、有機の就農先が見つかりにくい面があるという。

一昔前と違って、有機・自然栽培に対する関心は高まり、農林水産省も「みどりの食料システム戦略」の中で有機農業の推進を打ち出し、数値目標も定めた。しかし、長年にわたって実践してきた三浦さんは最近、強い危機感をいだいている。

設立の数年後から米づくりも手がける。最近は『大地の光』の自然栽培に手応え(同)

「実際には、有機農業者はさほど増えておらず、減農薬や肥料の工夫で安全性を高め、成果を上げている慣行栽培に比べ、有機の営農技術は発展途上なのが実態です。農業機械が大型化し、畑作関連の補助金は慣行栽培に手厚く交付される中で、大規模な投資ができる農家にお金が回ることも大きい。

また、米の値段が高くなってきたこともあり、畑(や乾田)で米を作る技術に取り組む農家が増えています。これは除草剤ありきの技術なので、慣行栽培でしかやれません。(圃場に)直に播種することで、玄米1俵あたり1万円の値段でも経営は成り立つ。だから、値段が高い有機のお米がいつまで消費者に買ってもらえるのか――と、強い危機感を持っています。今後は、有機栽培の技術をもっと高め、慣行栽培に負けないような作り方をしないといけないのではないか」

さらに、北海道の有機農業の課題として、本州方面から引き合いがあっても、広い面積で有機のジャガイモを作る人がきわめて少ないことを挙げる。人手不足もあり、大規模化にシフトできていないからだ。

担い手の問題もある。道内で最初のころに有機農業を始めた学生運動世代の人たちが引退時期を迎えているが、その子どもたちは農業を継がない人が多いという。

「(作業などの)合理化にシフトアップできていないし、新規就農者はいきなり投資はできず、需要に応えるだけの生産体制もありません。有機農産物を宅配便で送るのではなく、今後は物流体制を変えていくことも必要ではないか」(三浦さん)

緑肥の燕麦を作り、圃場に鋤き込んで土づくりに励む

課題山積だが、最近の傾向として「(無肥料での)自然栽培をやってみたい」と考える40代以下の新規就農希望者が増えているという。そうした若手世代の人たちは、生産物のブランド化がうまく、販売能力も持っているようだ。三浦さんが始めたころとは一味違った、新たな農業の世界があるのかもしれない。

今後の展開について聞くと、次のような方向を挙げた。

・当初から取り組んできた平飼い養鶏は継続する

・可能な作物は、自然栽培によって、より品質アップを追求していく

・大規模で合理化された形で、野菜を作る技術を創っていく

「あと10～20年は現役で働きたい。その間に農場の継承に目処をつけたいですね」と話す三浦さん。就農から25年、ひたむきな歩みが続く。

■はるか農園
千歳市東丘1034－4
☎：090・2694・0931
Fax：0123・21・3261
HP：halka-farm.com